

## ウトナイ湖サンクチュアリとその保全

### はじめに

ウトナイ湖については、以前から動植物の調査をされてきた方、保全に尽力をそそがれてきた方など、私の大先輩が大勢いらっしゃる。新米の私が筆をとるのはまことに厚顔かつ恐縮であるが、ウトナイ湖サンクチュアリ責任者として近況を報告させていたたくとともに、ウトナイ湖とその周辺の保全問題について述べてみたい。「湿原特集」ということであるが、湿原保全の具体的問題としてご参考にしていただければ幸いである。

### サンクチュアリの意義と現状

ウトナイ湖サンクチュアリの目的は、自然保護とその普及啓蒙である。前者については私も日本野鳥の会と苫小牧市との協約により、水域約二三〇haとその周辺の湿原、林を含めた五一・三haがサンクチュアリと指定され、自然環境を保全する地域として位置づけられている。後者については、中心施設ネイチャー・センターを訪れた方々へ

の案内・指導によって、「自然」に関心を持っていただくとともに、その保護にご理解を深めていただくようにしている。

自然保護運動の中でサンクチュアリの意義は、開発反対や行政批判から一歩踏み出した形で、自然を愛する者自身がお金と知恵と労力を出しあって、「自然保護」の成果を生み出したことにあると思う。昭和五十一年から始まった募金運動、全国から寄せられた様々な意見やアイデア、そして多くのボランティア作業などの結晶としてサンクチュアリが誕生した。

ボランティアの力は自然をそこなわぬように配慮した施設づくりのみならず、オープン後の運営をも支えている。会員の会費などを財源とする民間団体である日本野鳥の会としては、当初、職員として私人の配置がやつとであった。その力不足をおぎなうように全国から百人を上回る会員がボランティアとして協力してくれている。そのほかにも地元や近くの方々は日帰りで手伝って下さるので、そういった方々を加えたら、つかみきれないほどのお力添えでこのサンクチュアリが運営されていることになる。いまでは、ボランティア研修もここの活動の大きな柱となっている。

展示物や備品もほとんどが寄贈されたものである。来訪者は本年八月末までの集計で約三万人。よく、どういう人が多いかと聞かれるが、

実に様々に返答に苦勞する。親子連れ、町内会、学校、老人クラブ等々、様々である。行政関係の視察も多い。

## サンクチュアリの問題点

サンクチュアリにとつても私にとつても、すべてが初体験だった一年が過ぎた。一応の運営マニュアルもできた。一方で、遅れがちだった調査の充実、地域活動のバックアップ、ここをきっかけに全国でいくつか歩みはじめたサンクチュアリ計画への指導など、仕事はますます増えてゆく。次々に生じる自然保護上の問題への対処もある。

しかし、忙しさに甘えているわけにはいかない。ここで、現状での問題点を整理してみたい。

予想以上に来訪者が多いことは、普及啓蒙上の成果につながる。しかし、量ばかりでなく質を考えなくてはならない。ここは、「自然」に関心を持ってもらうための場所であるから案内、指導の充実をはかってゆかなくてはならない。

現状では私自身は管理業務が多いため、案内についてはボランティアにまかせる場合も多い。そのかわり、ボランティアが責任持って案内できるように、毎晩勉強会を開いている。

今年七月から常駐三人体制になったが、現状ではこれで手いっぱいである。今後、来訪者も増え、ボランティアも増えてゆくと予想されるので、より充実した体制作りが必要である。

もうひとつ、人が踏み込むことによる自然環境への影響、いわゆるオーバー・ユースの懸念がある。サンクチュアリができたために、人が踏み込める範囲は制限され小さくなった。また、採集行為も減ったし、利用マナーの向上でも寄与している。三万人の来訪者といつても、そのうち実際野外的なコースを歩いた人は二割ぐらいであろう。しかし、それでもサンクチュアリができる以前より、ウトナイ湖を訪れる方の数は増えていることには違いない。今後の課題として、充分配慮してゆかなければならない問題であろう。

## 水深低下と湿原の乾燥化

サンクチュアリ地域は五十七年三月、環境庁により国設鳥獣保護区の特別保護地区に指定された。法的にも規制が強化されたわけである。しかし、水域や湿原の保全については、周辺地域も含めて考えなければならぬ。実際、これまで直接的な開発行為のされていないウトナイ湖であるが、水深の低下と湿原の乾燥化が問題になっている。

水位（海面の高さをゼロにした場合の数字）については、日本気象協会室蘭支部のデータによると四十四年から五十五年の間に五十二センチくらい下がっているらしい。

三十年以上もウトナイ湖の植物を研究されている中居正雄氏によると、かつて普通に見られたトキソウやヒロハトンボソウなど湿地性のラン科の植物が、四十七年以後姿を消したという。体験的にも、昔の湿原は今と違って「ズブズブともぐって歩くのに苦勞した」そうだ。

マクロな視点からは自然の変遷も考えられるが、湖周辺の埋め立て、工場や宅地の造成、河川改修など様々な人為的な影響は十分考えられる。

現在の水深は深いところでも1m以下、せいぜい六十センチくらいであろう。ひざまである長靴があれば、湖岸から数メートルは楽に歩いて行ける。ボートで湖面に出てみると、沈水性植物が年を追って繁茂している様子もわかる。これ以上水深が低下すると、現在までは良質の水も悪化する可能性があるところまできている。

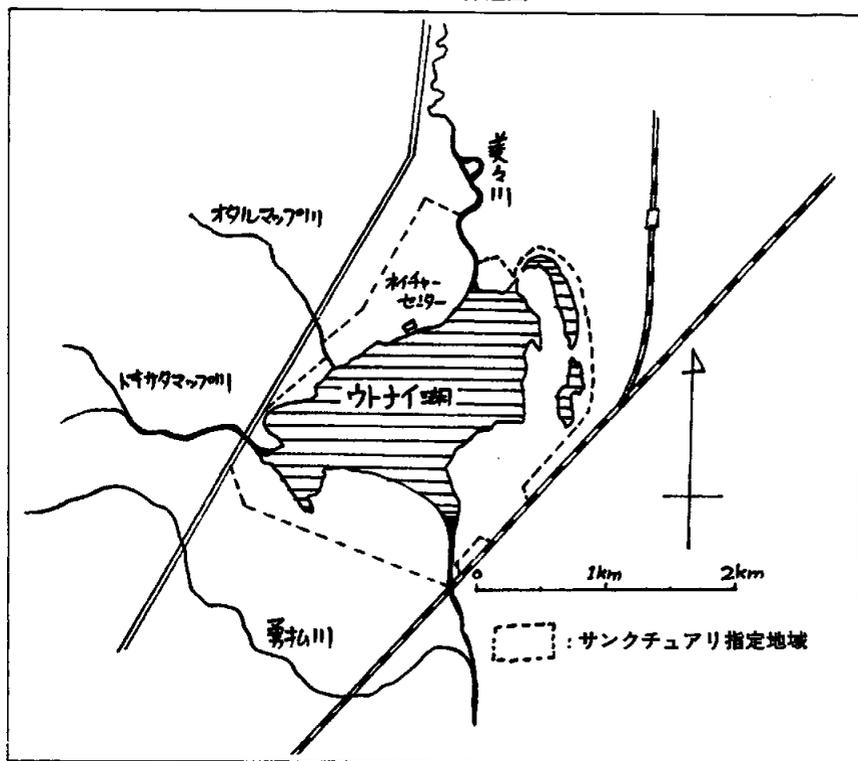
以下、水域や湿原の命とも言うべき水にかかわる保護上の問題を紹介してみたい。

## 美々川にかかわる問題

ウトナイ湖は図で示すように三本の流入河川があり、そこから供給される水の量や質がウトナイ湖と周辺湿原を保全するうえで最大のポイントとなる。

東の美々川は最も流入水量の多い河川で、千歳市内の千歳湖とその近くの湧水を水源としている。原始河川で蛇行の激しいこの川は、周辺に広いヨシ原を含む低層湿原を形成している。また、江戸から明治時代にかけて水上交通ルートとして重要な位置を占め

ウトナイ湖付近図



ていた歴史性もある。一方で、水はげが悪く水害の原因になっているとして、地元住民から数年来、一部をショート・カットするように陳情がくりかえされていた。

結局、五十七年三月に実施されたが、自然保護上の配慮から護岸、護床工事はされず、また旧河川もそのまま残す形となった。

美々川は、かねてより苫小牧自然保護協会（門脇松次郎会長）らによって環境保全が強く求められていた。そして全流域が昭和五十七年当初に、道の自然環境保全地域の指

定を受けるはずであった。ところが、千歳市からは同市内の流域、苫小牧市からは二つの支流部分について待ったの聲がかかり、いまもって正式決定はされていない。原始河川と湿原の重要性、また、ウトナイ湖一番の水源ということを考えると非常に残念な事態である。

五十六年には上流部近くの千歳市ゴミ処理場の拡張計画が明らかになり、水質への影響が懸念された。去る四十九年にはシアンが検出されたとして問題になったところだけに、ゴミや汚れの処理方法に対する批判がなされている。一方、明るい材料としては道水質審議会において、美々川の水質は「A類型」として答申され、五十七年三月に告示された。「A類型」とは清流を好むイワナなどの魚が住め、水道水にも利用できるという水質基準である。

現在とりざたされているのが、千歳川の水を太平洋側に流すという太平洋放水路計画である。この計画は石狩水系の洪水対策の決め手として石狩川水系工事実施基本計画に盛り込まれ、五十七年三月、建設大臣の決定をみている。美々川、安平川などのルートが考えられ、ウトナイ湖への影響もありうるとして、苫小牧自然保護協会が中心になって説明を求めている。そして、五十七年九月に開発局からの説明会が実現された。

説明会によると、ルートは正式決定していない、また話し合いの場をもうけ広く地元から意見を聞いてゆきたいということであった。しかし、どのようなルート設定をして、美々川上流部を通過するだろうという話も聞かれた。仮に直接美々川を通らないとしても、水源近くを通過するのであれば、地下水脈の分断などさまざまな影響が考えられる。日本野鳥の会としても、今後の動向を見守りつつ積極的な意見を提出してゆきたい。

### トキシサタマツ川、勇払川にかかわる問題

ウトナイ湖西側に目を転ずると、トキシサタマツ川が流れ込んでいる。この周辺の湿原は、苫小牧市の自然環境保全地区に指定されている。ここのミツガシワの群落は実に見事で、五月ごろに白い可憐な花を一面に咲かせる。つばみの段階ではピンク色をしているので、あたりに白とピンクのじゅうたんを敷きつめたような美しさである。この群落は、ウトナイ湖ではすでに西側にわずかに残っているにすぎない。

湖西側の湿原は広大な面積がすでに埋め立てられて、湖岸部分を残すのみとなっている。ここには国道二三四号線が通る計画があったが、自然保護団体の主張により湖岸から三〇〇mずらして作られることになった。

現在、湖岸部の湿原から道路までの三〇〇m幅の地域を緩衝緑地にするよう、日本野鳥の会や苦小牧自然保護協会で申し入れをしているところである。

さらにその西側には、勇払川が流れている。ウトナイ湖から流れ出る美々川と合流して、太平洋にそそいでいる。昭和三十九年から始まった河川改修によって、下流の直線化や護岸工事が進められていた。しかしその結果、ウトナイ湖の水収支バランスが崩れ、水位低下の一因になったと問題になった。また、当初の計画にあったウトナイ湖の周囲に築堤をめぐらし湖を遊水池とする考えも、湿原への影響など、自然保護上の問題ありと指摘され、工事は一時ストップしている。

道では五十三、五十四年の二年にわたって勇払川改修工事環境調査を行い、調和のつれた改修工事計画の策定を進めた。

その結果、勇払川はトキサタマップ湿原に新たな水路を掘りウトナイ湖に流入させるといふ当初計画を踏襲しながらも、ウトナイ湖流出口に自動起伏堰を設けて水位をほぼ二・一mに保つ、一方トキサタマップからの流入口には引き上げ堰を設け、湿原全体を増水時の遊水池として乾燥化を防ぐなどの考えで計画が進められているという。これについて、保護サイドからの意見を早急に提出したいと考えている。



### その他の問題

湖中央に流れ込んでるのがオタルマップ川である。ここは道からも市からも保全対策はなされていない。しかし、私たちが調査したところ、上流部に点在する湿原にはかなり良好なものが残されている。トキソウ、ツルコケモモなど、ウトナイではもう姿を見ることができない植物も多く発見された。水鳥の繁殖地としても良い環境である。しかし、この地域の多くはすでに企業などの私有地になっているため、開発が心配されている。

湖南岸地域から広がる古砂丘、樹林、湿地などの地域については苦小牧市環境部の調

査により、勇払原野形成の謎を解く古砂丘、高山植物と海浜植物が混在する特異な植物相など、重要性が報告されている。しかし、サンクチュアリ地域からはずれる部分については保全策はまだない。苦小牧東部工業基地に近く、将来流通拠点として重要な位置を持っているとも言われ、開発される可能性もある。



### おわりに

日本野鳥の会と苦小牧市によってサンクチュアリに指定され、国によって鳥獣保護区、特別保護地区となったウトナイ湖であるが、指定地域の周辺においてはいくつもの開発計画や保全上の問題がある。ここでは述べなかつたが近くにレジャー・タウンの構想もある。苦小牧東部工業基地の後背地にあたるこのあたりでは無理からぬことかもしれないが、むしろ、それゆえに開発で消える勇払原野の面影をとどめる重要性は高いといえる。早急に、サンクチュアリ指定地域以外も含めた保全計画の全体像を練る必要があるだろう。

この地域の自然を末長く保ち、サンクチュアリが多くの方が自然とふれあうきっかけの場であり続けるために、多方面からのご教示をいただければ幸いである。

(日本野鳥の会ウトナイ湖サンクチュアリレンジャー)